夢追い人

木材で繋がるグローバルに富んだ可能性

(有)高田製材所
代表取締役社長　高田　豊彦　さん

ラオスにて

ラオス人民民主共和国に大川の木工技術を指導している、JICA草の根技術協力事業も今年で三年目となります。今回はその事業に携わり、ラオスの方々に指導を行われている高田さんにお話を伺いました。

世界に大川を伝えるということ

ラオスは東南アジアのちょうど真ん中あたりに位置する国となります。東をベトナム、西をタイに挟まれており、日本（福岡）とは直線距離で3,145kmほど離れています。広さは日本の本州と同じくらいです。

高田さんがこの事業に携わられるようになったきっかけとは、どのようなことからでしょうか。

「大川木材事業協同組合の代表としてお願いされたことがきっかけですね。一年目はなかなか思ったように進んでいない印象でした。ですが、大きな可能性がある事業が足踏みするのはよくないので〝できる限り協力しよう〟と思い、この事業に携わっています。二年目、三年目と事業を進めていくなかで、実際に出向いて指導を行ったり、ラオスの方が大川に来て指導を行うようになり、パートナーシップが芽生えてきました。」

この事業は「政府開発援助（ODA）の中の草の根技術協力の枠組みを活用し、地方自治体の発意による国際協力を通じた我が国の地域の活性化を図るために認められた制度」である。つまり大川の技術・経験を用いてラオスの木材産業の技術発展に貢献し、ASEAN市場への進出・開拓を支援する事業です。その過程でラオスとのビジネスパートナーシップを構築し、①新たな木材調達ルートの開

※JICA　独立行政法人国際協力機構

製材されていく丸太

拓、②大川の木材・家具産業のASEAN市場への進出、③雇用促進、④地域経済活性化を目的とする大きなプロジェクトです。

「まずはラオスのメリットが最初です。大川の技術をラオスに教えようというプロジェクトですから、一〇〇％教えてあげますよというスタンスで指導しています。ギブアンドテイクではなくギブのみです。実際にラオスではとても感謝され、期待されている事業です。いい評価を受けていると思います」

では、実際にどのような指導を行っているのでしょうか。高田さんは製材に関しての技術を教えているとのことですが、詳細をお伺いしました。

「家具づくりの土台となる、木材の加工の仕方、乾燥の仕方を教えています。今はただ切っているだけで、用途に応じた切り方や加工が出来てない状態です。乾燥も家具に使えるほど、きちっとした乾燥が出来てないものもあります。そこをしっかり指導して、家具の製造につなげる。現在ラオスで製造されている家具は国内向け、輸出してもタイやベトナム、中国で販売する低質のものなので、富裕層向けの家具を作れるレベルになる手助けをする。ただ、この事業で一番勘違いしてほしくないのは、ラオスで教えた技術で作った家具を安く日本に輸入することが目的ではないということです。あくまでも先程述べた4つの大川経済発展に寄与するプロジェクトです。」

この事業で教えている技術をラオスの方々がものにするには十年くらいかかるとのこと。

「事業そのものは一応今年度で終わりますが、今後も長い付き合いになると思います。そうやって続けていく価値があり、大川が活性化する夢のある事業でもありますから」

お客様の声に応えるということ

長年の経験から外見だけで木の状態が七割方わかるという高田さん。そんな高田さんが代表取締役社長を務められている高田製材所についてもお話を伺いました。

大川市内でも毎日製材しているのは三社ほどで、その内の一社が高田製材所です。

十年以上前にお話を伺った際は、一〇〇種類以上とお聞きした材木の種類ですが、現在は、なんと二五〇種類ほどと倍以上の種類を取り扱われています。

「国内の木材とアメリカ・カナダ、東南アジア、アフリカの国々など、おおよそ三十ヶ国くらいから輸入した木材があります。規制の関係で、海外から木材を輸入してくるというのはだんだん大変になってきていますが、様々な使い方があること、『こういう木材はないだろうか』というお客様の声があることが、豊富な種類を揃えていったことの背景にありますね」

多くの種類が並ぶ展示場を実際に見られると驚かれるお客様が多いとのことでした。

「取り扱う木材の種類が豊富なことや培ってきた長年の経験から様々な提案が出来ます。見た目が似ている木材でも用途や予算に応じて、お客様の要望に沿った提案が出来るのも強みです」

可能性があるということ

様々なお話を伺っていくなかで、「ラオスをひとことで表すとするならば？」とお尋ねすると、「大川との関わりにおいて〝大きな可能性がある国〟」とお答えいただきました。

「すぐに結果が出ることではないですが、十年後二十年後を見据えた時、ラオスと交流を持って、お互いの行き来やビジネスなどが始まったということが、『あの事業やっていてよかったね』という結果に繋がると思います。そのために今事業を続けています。ラオスとのビジネスは、大川にとって、とても夢がありますから」

現在のラオス国の印象は「五十年前の日本のような感じ」とのこと。これからまだまだ発展していく可能性がある夢のある国ともお話されました。

では、高田さんご自身の夢はなんでしょうか。

「とにかく大川が活気のある街になるように、もっともっと頑張っていきたいです。大川はいいものを持っているのに、全国に伝わっていないと感じます。市役所もセールス課を中心にいろいろとされています。私は木材で全国の人を大川に呼び込んで、家具屋さんは家具で呼び込んで。自身の得意分野で大川に人を呼びこむことができれば、大川はもっと良くなると思うし、発展すると思います。今はそれが目標であり夢ですね」

展示場の壁一面に展示される樹種

製材された一枚板の展示も